タイ：民主党 VS 愛国党

次期連立政権の核はチュアン現政権の第一党・民主党か、「通信王」タクシン元副首相が創設したタイ愛国党か――タイでは(今年11月の下院任期満了までに実施される)総選挙を睨んで大規模な政界再編が進行中だが、その再編は対立するこの２党を巡って二極化に向かっている。「新興勢力」の愛国党が各政党から反主流派を吸収していく一方で、守勢の民主党は各党との「反愛国党」連携を模索するという対立構図だ。

タイ政治における「輪廻の法則」

かつて「タイ政治の輪廻」といえば、クーデターによる軍部主導の政権と民主選挙による政党政治とが交互にやって来る現象のことだった。しかし、1992年９月の民主党(チュアン党首：AMR00/1/1-15)を核にする旧(第一次)チュアン政権の成立を機に民主政治が定着して以来、タイの政権交替には別の「輪廻の法則」が働いているように見える。その「法則」とは「主要政党の有力派閥が別の政党に大挙して移籍することで、移籍先の政党が政界第一党となって次の政権を担っていく」というものだ。

95年にバンハーン政権が成立したのは、ナロン元副首相率いる旧・正義団結党の主流派(「タートタイ」グループ)が一致してタイ国民党(バンハーン党首)に加わったからだ。96年のチャワリット政権成立の場合には、その国民党からサノー元内相(AMR00/3/1)率いる最大派閥(「ワン・ナム・ジェン」グループ)が新希望党(チャワリット党首)に移籍したという背景がある。

また、95年以来野党にあった民主党が97年11月、総選挙に拠らずに政権に返り咲いた(第二次チュアン政権)のも、ワタナ現副内相(AMR00/3/1)をリーダーとする12名の議員(「コブラ」グループ)が民主党主導の多数派工作に応じて、陣営を「鞍替え」した要因が大きい(注１)。

昨年来、次期総選挙を睨んで活発化している一連の政界再編では、またしても「ワン・ナム・ジェン」グループをはじめとする各党の有力派閥が公式、非公式に「鞍替え」の動きを見せている。今度の移籍先は、大富豪で「タイの通信王」との異名をとるタクシン・チナワット元副首相([人物データ・ファイル]参照、以下《ｐ》)が98年７月に創設したタイ愛国(タイ・ラック・タイ)党(注２)。

先(96年11月)の総選挙の後に結成された愛国党は自党の現職下院議員を持たない。結成時以来の中枢メンバーはタクシン党首側近で、政界では比較的無名の活動家たちだ。にもかかわらず、特に今年に入って与野党の現職議員が自党を離党(議員も辞職)して愛国党に「馳せ参じる」現象が起きている。今は旗幟を鮮明にしていなくても、総選挙日程が明らかになった時点で、愛国党参加を正式表明することが確実な議員も多い。地元マスコミの推定でも、総選挙直前には愛国党に移籍する現職議員数は民主党議員数を上回る模様だ。

こうした「愛国党人気」は、何よりも一代で東南アジア有数の財閥を築き上げたタクシン党首個人の「何かやってくれそうな」行動派というイメージに負うところが大きい。一方、現政権を担う民主党はいきおい経済再建の遅延等を批判されやすい立場であり、守勢に立たされている感は否めない。チュアン首相のクリーンな堅実派というイメージも、最近は地元マスコミから「優柔不断」というレッテルを貼られることが多い。自党への忠誠度が低く、権力や利権の動向に敏感な旧来型の政治家たちは、愛国党が次期政権に就く可能性が高くなったと見て、同党に向かう一種の「バンドワゴン」現象を引き起こしているといえる。

各政党・派閥の動向

こうしたタイ政界の民主党と愛国党を巡る二極化の中での、各政党・派閥の動向を概観してみる(各党の下院議員数は昨年来の政界再編の動きがまだ始まらない時点のもの)。

【与党第二党・国家開発党(コーン党首、51議席)**】**チャムロン・クルックントート前同党副党首《ｐ》はすでに正式に愛国党に移籍し、愛国党第四副党首に就任している。同党から今後、チャムロン氏に従う議員が少なくとも15名はいるとみられる。スワット幹事長(AMR99/7/1)、プラチュアップ首席顧問も他党へ移ると噂されている。

【与党第三党・タイ国民党(バンハーン党首、39議席)】近年党内で燻っていた(バンハーン党首の)シンラパアーチャー家と(プラマーン前党首の)アディレークサーン家の対立がここにきて分裂に発展。金権体質の同党では「良識派」で知られるポンポン・アディレークサーン前農相は最近、党幹事長を辞したが、タクシン愛国党党首は同氏とその支持者に愛国党への移籍を打診している。

【野党第一党・新希望党(チャワリット党首、125議席)】党内最大派閥でサノー元内相率いる「ワン・ナム・ジェン」グループはすでに愛国党への参加を確定している。同グループを支持する同党議員40－50名が最終的に愛国党に移る模様。すでに同グループからはピタック元副外相《p》が愛国党第二副党首に、ソーンアット元副保健相《p》が同第七副党首にそれぞれ就任している。サノー氏はまたしても次期政権の「キング・メーカー」を演じることになるかもしれない。また、「新世代」政治家の代表として同党の「看板」であり、サノー氏とは対立関係にあったチャトゥロン前幹事長(AMR99/7/1)ら若手議員も愛国党に参加する可能性がある。チャワリット党首は「政界マフィア」的なチャラーム副党首(警察大尉)らに依存して、党勢の衰退した同党を維持していくことになる。

【野党第二党・社会行動党(スウィット党首、19議席)】同党は主流派である「新世代」政治家のスウィット党首(AMR 99/7/1)グループ12名が愛国党への移籍を明確にしている。反主流派のモントゥリー前党首派は民主党に合流。故ククリット首相が創設した伝統ある同党は消滅の危機に直面している。

【野党・道義党】同党唯一人の議員だったスダラット前幹事長(元副内相)《p》は愛国党への参加に名乗りを挙げた最初の下院議員。昨年12月に議員を辞職し、正式に愛国党に移った。タクシン氏はかつて道義党党首だったこともあり、個人的な信頼関係が厚いスダラット氏は、愛国党では第一副党首に選出されている。

次期総選挙は97年発効の新憲法による初の小選挙区比例代表並立制で実施されるとはいうものの、やはり「地盤」、「看板」を持つ現職議員が再選される確率は高い。地元政界通は各党の現職議員を多数取り込んだ愛国党が総選挙で第一党になると予想している。それでも「党員を『盗んだ』愛国党に反発する各党が、民主党を中心に多数派を形成する可能性が高く、民主党政権は存続するだろう」(チャムニ民主党副幹事長)と見る向きもある。

タクシン新政権の成立で90年代の「輪廻の法則」が依然として作用することになるのか。タイ政局は激動の季節に入る。

(注1)これらの政権交替で重要な役割を演じたナロン元副首相、サノー元内相、ワタナ副内相はいづれも「チャオ・ポー」と呼ばれる「政界マフィア」的な政治家である。
「チャオ・ポー」とタイ政治との関係については本誌2000年3月1日号の本欄「タイ版『ゴッド・ファーザー』の政界人脈」を参照されたい。
(注2)タイ・ラック・タイは「Thai loves Thai」の意。

〔人物データ・ファイル〕
タイ愛国(タイ・ラック・タイ)党の主要幹部(2000年3月26日の党大会で選出)

■党首 Party Leader
タクシン・チナワット(警察中佐、博士)
Thaksin Shinawatra, Pol.Lt.Col. Dr.

一代で警察官から東南アジアでも有数の財閥「チナワット・グループ」を築き上げた「タイの通信王」で元副首相。華人系タイ人(雲南系)。

1983年に警察に在籍のまま、コンピューターの輸入販売会社を設立。主に官公庁にコンピューターを納入するが、最大の顧客は内務省警察局であり、同局のコンピューター化計画委員会の委員も務めた。その後、この会社を母体に発展した「チナワット・グループ」の事業は、チャチャイ政権時代(1988－91)に政府の電気通信事業の利権を獲得し、驚異的に拡大。タイ国内のみならず、ラオスでもケーブルテレビ局を開局したほか、商業衛星の打ち上げ、移動電話会社の設立などの新事業を展開した。

94年10月、グループの会長職を一旦夫人に譲り、旧(第一次)チュアン政権の内閣改造に伴い外相に就任することで政界入り(当時は45歳でタイ史上最年少の外相だった)。この時点では無所属の非議員だったが、当時のチャムロン道義党(PDP)党首の推薦で同党の枠内で入閣した(しかし、政治職とビジネスの利害との関係を追求する声が野党などから上がったため101日後に辞任)。

憲法上の要求を満たすため、「チナワット・グループ」傘下企業の持ち株を売却した後の95年5月、チャムロン氏から PDP 党首の地位を受け継ぐ。同年7月の総選挙でバンコク2区から初当選。バンハーン連立政権・第3党の党首として副首相に就任した。副首相時代は、悪名高いバンコクの交通渋滞の解決に取り組むなど、実効はともかく、その献身的な努力は一般市民も認め、各種調査では「次期首相にしたい人物」の筆頭になった。

しかし、このころから PDP は内紛などによる党勢衰退もあり、同氏は先(96年11月)の総選挙に出馬せず、政界から一時身を引いた。それでも「何かやってくれそうな」イメージは現在でも顕在で、特にバンコク首都圏や出身地のタイ北部では絶大な人気を持つ。97年8月、そうしたイメージに期待したチャワリット首相(当時)は内閣改造で同氏を「民間」から副首相に抜擢しているが、チャワリット政権は4カ月後に経済危機の混乱の中で崩壊した。

その後、再び野に下っていた同氏だが、98年7月になってタイ愛国党を創設、その党首になり次期総選挙で民主党主導の現連立政権に挑戦することを宣言。総選挙が近付くにつれて、その豊富な資金力もあり、同党が政権を担う可能性があると見た各党の現職下院議員らが派閥単位に入党しているのは同欄の本文で解説した通りだ。

▼データ
【年齢】50歳(1949年7月26日生まれ)
【生地】北部チェンマイ県
【学歴】サンパン警察士官学校卒
(第25期、優等)
米イースタン・ケンタッキー大学で修士号(刑法学)取得
米サム・ヒューストン州立大学で博士号(刑法学)取得
【経歴】内務省警察局に入局
1973：国境警備警察(BPP)の航空支援部隊に配属

1975：首相府に出向(警察関係業務)
1976：博士号取得のため米国留学
1979：警察局研究企画部第６班長
　　マヒドン大学社会科学部(犯罪学)講師兼任
1981：警察情報センター副所長
　(警察少佐に昇級)
1983：㈱チナワット・コンピューター＆コミュニケーションズを設立(会長)
1984：警察中佐に任官
1986：警察士官学校教官
1987：首都圏警察本部政策・企画担当官
1987：警察局を退職
1994：[10月] 外相(チュアン改造内閣、非議員：PDP 枠)
1995：[５月] 道義党(PDP)党首
　　[７月] 下院議員に初当選
　(バンコク２区)
　　副首相(バンハーン内閣)
1996：[５月] 副首相に再任
　(第３次バンハーン内閣)
　　[８月] 副首相を辞任
　(PDP がバンハーン政権離脱)
1997：[８月] 副首相(経済担当)(チャワリット改造内閣、非議員)(－11月)
1998：[７月] タイ愛国党創設・党首
2000：[３月26日] 同党党首に再選
【家族】子供３人
【横顔】
・55歳前に首相になり、55歳で政界を退き、その後大学教授になりたいとの夢を抱いており、それを公言している。

■第一副党首 First Deputy Party Leader
スダラット・ケユラパン
Sudarat Keyuraphan, Mrs.

政界入りのきっかけは道義党(PDP)の創設者、チャムロン元バンコク首都圏知事の「道義の確立」という政治理念に共鳴したことにある。1992年に同党の下院議員として初当選して以来、女性で初めて副運輸・通信相、副内相、政党(道義党)幹事長を歴任。道義党がチャムロン氏の政界引退をきっかけに党勢が衰退すると、96年総選挙では同党で唯一人の下院議員当選者になった。97年に同党の「寺院派」(注)との対立から、自らの政治集団「パランタイ(タイの力)」を創設。98年７月にタイ愛国党が創設されると、道義党籍を維持しながら、同党への参加を表明した。しかし、道義党幹部の圧力から99年12月に同党を離脱し、下院議員も辞職。今年３月下旬のタイ愛国党大会で第一副党首に選出されたのは、タクシン同党党首との個人的な親交とともに、同氏が早くから同党への参加を表明してきたからだ。

７月１日のバンコク首都圏知事選にタイ愛国党から立候補することが確定。バンコク首都圏では絶大な人気を持つ同氏だが、ここに来て知事選への出馬を示唆しているサマック・スンタラウェート人民党(PTP)党首(元副首相)が強敵になることは必至の状況。

▼データ
【旧政党】道義党(PDP)：幹事長
【年齢】39歳(1961年５月１日生まれ)
【学歴】チュラロンコーン大学卒(商学士：国際マーケティング)
　　同大学サシン経営学大学院から修士号取得(会計学)
【経歴】
1992：[３月] 下院議員に初当選(PDP)
　　下院財政・金融委員会委員
　　[９月] 下院議員に再選
　　政府副スポークスウーマン
1993：PDP スポークスウーマン
1994：[９月] PDP 幹事長
　　[10月] 副運輸・通信相
　(チュアン改造内閣)
1995：[７月] 下院議員に再選
　(バンコク首都圏７区)
　　副内相
1996：[11月] 下院議員に再選
　(バンコク首都圏７区：トップ当選)
1997：[11月] 政治集団「パランタイ(タイの力)」結成
1999：[12月] 道義党を離脱し、下院議員を辞職
2000：[３月26日] タイ愛国党第一副党首に選出
【家族】夫君はソンポン・リーラパンヤラート(Sompol Leelapanyalert)氏で、チュラロンコーン大学の学生時代に出会った。二人の間には１子(愛称はノン・ボット Nong Boss)。
【横顔】
・父親のソムヨット・ケユラパン(Somyos Keyuraphan)氏はナコンラチャシマ県選出の下院議員だったが、自らに対する暗殺未遂があったことを機に政界から身を引いた。この父親は今でも同氏の「政治顧問」である。
・幼少の頃、家族が経営する会社の建設現場で、厳しい父から労働者、清掃婦、塗装工などとして働く訓練を受けた。地元マスコミとのインタビューで同氏は「この経験は私の後の人生にとって素晴らしい教育だった」と語っている。
・チャムロン元道義党(PDP)党首の政治理念に共鳴し、同党の運営する政治学校に通っていたが、その人柄を党首脳に認められたことが、92年３月の政界入りとなった。
・「流血事件」後の92年９月の選挙ではバンコク首都圏で最高得票数で当選し、第一次チュアン政権の副スポークスウーマンに任命された。この道義党時代は同党の「機関車」の一人。その政界での華麗な動きの故に地元マスコミからは「危ない魅力を持つ女」と呼ばれてきた。
・95年７月の総選挙ではバンコク首都圏７区でトップ当選し、３回生議員にもかかわらず初入閣。先(96年11月)の選挙でも同区でトップ当選している。
(注)道義党はチャムロン初代党首が熱烈な信者だった仏教系の新興宗教「サンティ・アソーク」が母体となっていたため、「寺院派」と「非寺院派」の党員の確執が結党当初から潜在していた。

■第二副党首 Second Deputy Party Leader
ピタック・インタラウィタヤナン
Pitak Intrawithayanunt
(または Indravitayanan)

成功した実業家であり、70年代にチャチャイ外相(当時：後に首相)の外交政策に賛同して中国への投資を始めた。いわば、今日の対中国投資家のパイオニア的存在。チャチャイ元首相がタイ国民党から分離して、92年に国家開発党(CPP)を創設すると同党の有力な資金提供者となる。96年にチャワリット連立政権で非議員でありながら CPP 枠で副外相に任命されたのは同党への貢献度を買われたため。CPP がコーン党首(現副首相兼保健相)体制になってからも派閥のリーダーとして第一副党首を務めた。98年10月に CPP の現チュアン連立政権への参加に伴い、改造内閣で首相府相に就任。しかし、99年７月の内閣改造で一部 CPP 党員の圧力で閣僚ポストを外されたことに反発し、CPP と袂を別った。

サノー元内相(元新希望党幹部)を中心に集団でタイ愛国党に参加することになったワン・ナム・ジェン(Wan Nam Yen)グループの幹部の一人でもある。

▼データ
【旧政党】国家開発党(CPP)：第一副党首
　(非議員)
【年齢】57歳(1943年４月16日生まれ)
【学歴】米イースタン・ワシントン大学卒
　(経営学)
　　同大学から経営学修士号(MBA)取得
【経歴】(チャチャイ)首相顧問
　　上院議員(外務委員会委員)
1996：[12月] 副外相(チャワリット内閣)
　(－97)
1998：[10月] 首相府相(チュアン改造内閣)
　(－99)
2000：[３月26日] タイ愛国党第二副党首
【活動】タイ中国友好協会理事
　　米イースタン・ワシントン大学評議会員
【家族】パンプラチャー(Panpracha)夫人との間に２子
【横顔】
・パンプラチャー夫人は次期総選挙で東北部ブリラム県からの初出馬を表明しており、地元の「政敵」は同氏夫妻の動静に神経を尖らせている。

■**第四副党首** Fourth Deputy Party Leader
チャムロン・クルックントート
Chamlong(または Jumlong) Krudkhunthod

元々の職業は弁護士だけあって、数多い国会議員の中でも、その弁舌の流暢さ、正確さには定評がある。野党にいた時は不信任案審議の締めくくりの演説は同氏が行うことが慣例化していたほど。特に92年に成立した旧(第一次)チュアン政権に対する不信任案審議ではその能力を大いに発揮した。1996年12月発足のチャワリット内閣で5回生にして初入閣。しかし、現チュアン内閣では98年10月から国家開発党(CPP)が連立に参加したにもかかわらず、同氏には閣僚ポストは提供されなかった。

昨年来、CPP のコーン党首(副首相兼保健相)、スワット幹事長(工業相)らと対立する中で、タイ愛国党の会合への参加が目立つようになっていた。今年3月中旬に正式に同党を離脱するとともに、下院議員も辞職した。次期総選挙前までには同氏に従って15名ほどの CPP 議員がタイ愛国党に参加すると見られる。総選挙では議席数の多いナコンラチャシマ県で同党候補者のための票の取りまとめ役を期待されている。

▼データ
【旧政党】国家開発党(CPP)：副幹事長
【年齢】52歳(1947年12月13日生まれ)
【生地】ナコンラチャシマ県ダンクントート郡
【学歴】タマサート大学法学部卒(弁護士資格)
【経歴】弁護士
1983：総選挙に出馬するが、落選
1988：下院議員に初当選
(ナコンラチャシマ県)
1990：(チャチャイ)首相次席秘書官
1994：(プラチュアップ)農業・協同組合相秘書官
1996：[11月] 総選挙で下院議員に再選
(ナコンラチャシマ5区：トップ当選)
[12月1日] 副教育相(チャワリット内閣、初入閣)(－97)
2000：[3月26日] タイ愛国党第四副党首
【横顔】
・1983年に旧タイ万民党党首：アーティット・カムランエーク大将)候補として、立候補するが落選。しかし、88年には当時、東北タイで吹き荒れた「アーティット・フィーバー」に乗って初当選(ナコンラチャシマ県)した。のちに、旧正義団結党を経て CPP に。
・政界の「ヤング・タークス」と呼ばれた「グループ16」の法律問題顧問としても活躍。
・地元ダンクントート郡のバン・ライ寺管長で、神秘的な霊力の持ち主として知られるルアン・ポー・クン・パリスト(Luang Poh Khoon Parisutho)師を熱烈に信奉している。選挙運動中、同師の作ったお守りを選挙民に配って歩く戦術は支援者獲得に大きな効果があった。

■**第六副党首** Sixth Deputy Party Leader
スラキアット・サティアンタイ(博士)
Surakiat Sathirathai, Dr.

同氏の政治活動歴は1990年のチャチャイ政権時代に始まる。当時、チャチャイ首相はバーン・ピサヌローク(首相官邸)に数人の若手学者を集め、アドバイザーにしていたが、彼らは共和制国家の「大統領補佐官」のように行動したため、政治家たちから煙たがられた。そうしたアドバイザーのリーダー格だったのが法学者の同氏である。95年7月発足のバンハーン政権ではタイ国民党(CTP)枠で37歳(当時)の若さで蔵相に就任。しかし、翌年5月の内閣改造で更迭され屈辱を味わった。その後、チャワリット政権では首相経済・外交問題顧問、現チュアン政権ではタイ石油公社(PTT)理事などの立場から経済問題に歯に衣着せぬ発言をしている。

元来、様々な政治家と親交を結ぶのがうまく、今度は次期政権を担う可能性がありそうなタクシン・タイ愛国党党首と組むことにしたようだ。

▼データ
【現職】法学者、公社理事
【年齢】41歳(1958年6月7日生まれ)
【学歴】チュラロンコーン大学法学部卒(優等)
米タフツ大学フレッチャー法律・外交スクールで修士号取得
米ハーバード大学法学部で法学修士号、および博士号取得
【経歴】チュラロンコーン大学法学部法律・開発研究センター所長
同大学法学部副部長(国際関係)
(チャチャイ)首相政策顧問
国会議長顧問
首相府国際経済政策調整センター顧問
1995：[7月] 蔵相(バンハーン政権)(－96)
1996：(チャワリット)首相経済・外交問題顧問
1998：[5月] タイ石油公社(PTT)探査生産社会長
1999：[11月] PTT 理事
2000：[3月26日] タイ愛国党第六副党首
【趣味】読書
【家族】スタワン(Khunying Dr. Suthawan)夫人
【横顔】
・ストン・サティアンタイ(Suthorn Sathirathai)元大蔵省財政政策局長の一人息子(ストン氏は大蔵省退官後、バンコク・シティ銀行、レームトーン銀行の役員を務めた財政・金融政策の専門家)。
・95年のバンハーン政権発足時にバンハーン首相は同氏を外相に任命する予定だったが、外相がタイ指導党(NTP)枠になったため、この計画を断念し同氏を蔵相に任命した。外相の方が同氏には向いていたかもしれない。

■**第七副党首** Seventh Deputy Party Leader
ソーンアット・クリンプラトゥム
Sora-ath Klinprathum

同氏も、政界の「黒幕」的存在であるサノー元内相率いるワン・ナム・ジェン・グループに属する政治家の一人である。1986年の政界入り以来、一貫してタイ国民党(CTP)議員として歩んできたが、先(96年11月)の総選挙の前に CTP を離脱し、NAP に移った。地元マスコミは当時、CTP の衰退を見越した「先見性」とも「変わり身の速さ」とも評した。今回のタイ愛国党への移籍もそうした「先見性」によるものか。

▼データ
【旧政党】新希望党(NAP)
【年齢】44歳(1956年3月17日生まれ)
【生地】バンコク
【学歴】米アイオワ州立大学理学部卒
(コンピューター科学・統計学)
米カソリック大学で工学修士課程
(技術経営)修了
【経歴】
1986：下院議員に初当選
首相府政務官
のち、(タウィット)大学相秘書官
1990：[8月] 副教育相(第一次チャチャイ改造内閣)
1990：[11月] 首相府相(同)
1995：副保健相(バンハーン内閣)
1996：[11月] 下院議員に再選
(ラチャブリ1区)
[12月1日] 副保健相
(チャワリット内閣)
2000：[3月26日] タイ愛国党第七副党首
【家族】ポーンラット(Pornrat)夫人との間に2男1女
【横顔】
・タウィット・クリンプラトゥム(Thavich Klinprathum)元副首相を父親に持つ2世議員。親子で大学庁の大臣とその秘書官を務めたこともある7回生議員。95年7月の総選挙では、父親は落選したものの、同氏はラチャブリ1区でトップ当選を果たしている。

(アジア政治アナリスト 勝田 悟)

関係改善の“人質”にされる台湾資本
ー中国が陳支持経済人に圧力ー

台湾の陳水扁政権誕生の推進力となったノーベル賞学者、李遠哲・中央研究院院長ら「国政顧問団」に名を連ねた有力財界人が、中国側から「台湾独立を支援する商人」として名指し非難されるなど、露骨な圧力を受けている。世界的なパソコンメーカー「エイサー」や海運、航空大手の「長栄グループ」ら中国への投資・経済協力に積極的な経済人だけに、中国側が陳政権誕生を機に、従来の「政経分離」政策を見直す兆候ではないかとの見方すら出始めた。5月20日の総統就任式を前に陳氏周辺を揺さぶることで、中国に「善意」を送る陳から、一層の譲歩を引き出そうとする戦術とみられるが、これまで北京から好意的な扱いを受けてきた台湾資本が、関係改善の“人質”になった感が強い。

「3通も遠のく」と警告

台湾財界人に対する圧力が顕在化したのは4月8日。国務院台湾弁公室副主任の李炳才・副主任が新華社を通じ、財界人への批判談話を発表した。李副主任の談話の趣旨はこうだ。「中台貿易は99年、1,604億ドルに達し、台湾側は約166億ドルに上る貿易黒字で、台湾の産業構造の高度化と経済安定に役立てている。にもかかわらず、台湾財界のトップの中に台湾で公然と台湾独立を支持する一方、中国との経済活動で利益を上げている者がいるのは絶対に許せない」。新華社電はまた、対外貿易経済省当局者の話として、台湾新指導部が「一つの中国」の原則を直ちに受け入れるべきだと要求、「そうしなければ、両岸の直接貿易など3通や、金門島など離島間の小3通は実現できない」と伝えた。

この報道に続いて、北京や香港の新聞は「国政顧問団」に参加した台湾財界人の名指し批判を開始する。これまで批判されている財界人は▽宏碁(エイサー)の施振栄・理事長▽長栄グループの張栄発総裁▽奇美実業の許文竜理事長▽大陸工程の殷琪理事長の4人に加え、中華自動車の林信義副会長(次期経済相)、玉山銀行の林鐘雄理事長、義美食品の高志明社長ら。具体的な圧力として伝えられるのは、(1)中国入境ビザの発給拒否(2)新規事務所の開設拒否(3)石油化学原材料の輸入許可凍結－－など。噂の域を超えない情報もあるが、今後中台関係が悪化した際の中国側の出方を占う上で参考になる動きだ。

ABS樹脂の輸入許可凍結も

【エイサー】世界第9位のパソコンメーカー。昨年5,000万ドルを投資し、広東省中山に月産20万台の卓上パソコン工場を立ち上げ、2005年には世界第2のパソコン市場となる中国市場での事業展開を活発化させる。同社は中山に第2、第3工場のほか、江蘇省蘇州、広東省東莞にも工場を建設の予定。施理事長は4月25日に北京で開かれるシンポジウムで講演の予定だったが、ビザ発給拒否の情報がある。また同社が招待した中国対外経済貿易省高官の5月訪台が延期された。施理事長は中国の李嵐清副首相(科学技術担当)との関係が良く、中国のコンピューターメーカー「聯想」とも協力関係にある。

【長栄グループ】世界トップクラスの海運会社「長栄海運」(林省三会長)は、中国14カ所に事務所を持ち、4カ所のコンテナ・ヤードとコンテナ輸送、コンテナ製造会社各1社に投資しているが、いまのところ影響は受けていない。しかし長栄海運が中国遠洋運輸グループ(ＣＯＳＣＯ)と、極東－オーストラリア航路の共同運航を祝うレセプション(4月9日)が延期されたり、陳当選後に長栄グループの代表が国務院台湾弁公室から呼び出しを受け、「台湾内部で台独支持を公然と支持するな」とくぎをさされた。上海市と福建省アモイ市の台湾事務弁公室当局者は、長栄グループなど陳支持の大企業の新たな事務所開設は不許可の方針を明らかにした。

張栄発は3月20日、陳との会談前に「陳が台独でないことは良く知っており、もし陳が私に両岸交渉の代表を務めるよう要請すれば検討しても良い」と述べている。張の趣味はゴルフと、個人所有のクルーザーでの旅行。

【大陸工程】殷の父親の殷之浩は江蘇省出身。関連企業は江蘇省への投資が多いが、大陸工程自体は投資していない。